

あゆみ通信

VOL. 196

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

第3回聞法会開催



7月15日(火) 午後2時から第2組聞法会が、阿倍野区の法山寺(藤原憲住職)で、組内の住職や坊守、門徒、推進員23名が参加して猛暑の中開催されました。

墨林浩組長(光照寺住職)が挨拶を。藤原憲住職による調声で「正信偈」(草四句目下)・念仏・和讃・回向を唱和しました。

今回のご講師は昨年もお話いただいた宮部渡先生(第15組西稱寺住職)で、今回は天親菩薩の前半についてお話いただきました。

はじめに、一般に仏教は釈尊から始まったと言われているが、浄土真宗では、弥陀の本願から仏教は始まると言われていると。

このことは、『歎異抄』第2章に「弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず・・・」(『聖典』第2版768P)に表さられていると。そして、善導、法然、親鸞に伝えられてきたと。

また、「千部の論主」と言われた小乗仏教の大家、天親菩薩が兄の強い勧めを受けて、小乗仏教を捨てて、浄土の教えに帰されたことを親鸞聖人はとても大事にいただかれ、『正信偈』の天親菩薩章の冒頭に「天親菩薩造論説 帰命無碍光如来」と謳っておられると。

休憩後は、「群生を度せん

がために、一心^{あらわ}彰す」の「一心」について、「皆さんは、南無阿弥陀仏」一つの心でもって暮らしてきましたか？」と尋ねられました。

そして凡夫である私たちには、一心は成り立たないのではないのか。二心も三心もあるのが私たちではないかと。

しかし、そんな私たちを捨ておかない「はたらき」を本願と言うのであると。

「一心」が私の心にまでなっ
て下さっていることに気付く
ことが信心であると話されました。

(レポート：細川克彦〈佛足寺〉)

第2組聞法会案内

日程 14:00~16:00

教材「初めての正信念仏偈」

をご持参ください

お持ちでない方は、受付で
ご用意します

参加費 500円

第4回

日時 8月6日(水)

会場 光照寺(天王寺区上汐)

講師 宮部 渡先生

(15組 西稱寺住職)

第5回

日時 9月6日(土)

会場 唯専寺(浪速区敷津西)

講師 廣瀬 俊先生

(17組 法観寺住職)

第6回

日時 10月16日(木)

会場 西教寺(阿倍野区阿倍野西町)

講師 廣瀬 俊先生

(17組 法観寺住職)

予 告

門徒会と合同研修会

日時 10月2日(木) 13:30

会場 光照寺(天王寺区上汐)

講題「念仏修行～世のなりわいに
いそしまん～」

講師 乙部大信先生

(3組 恩楽寺住職)

親鸞のことば

すべての人は仏に
なることができる

わくぜん

感染の衆生、ここに
して性をみることあ
たわず。煩惱に覆わ
れるかやえに 教行信証

この言葉は、仏教の有名な經典の一つである『涅槃經』の「一切衆生はことごとく仏性はあれども、煩惱覆えるかゆえに見ることを得ることあたわず」に基づいています。皆さんの多くはこの『涅槃經』の教えを「すべての生きるものには仏の性質があるけれども、煩惱が邪魔をして見るができない。だから修行を重ねて煩惱を取り除かねばならない」と受け止めるのではないのでしょうか。

しかし親鸞は、煩惱に覆われているのか私たちであり、仏の性質を見ることはできないが、阿弥陀さまの力によって浄土で仏になると受け取ったのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

あらためて法蔵さん

『正信偈』に出てくる法蔵菩薩について、教えていただいたのは、宗祖親鸞聖人750年御遠忌法要のお待ち受けイベントとして2007年に第2組で10年ぶりに開催された「第2回第2組推進員養成講座」で講師の新田修己先生(平野区正業寺住職)からでした。

お釈迦さまが法蔵菩薩になって、私たち一人ひとりの心の奥底で、共に人生を見守り続けて、時として「あなたのその受け止めでいいのか」と、おりに触れて声掛けをしてくださっているのですと。

でも、指摘されても、そのことに気付かなければ、受けとれないのだが、粘り強く絶えず呼びかけ続けてくださっているのですと。

やっと、最近になって、時折、「これは法蔵さんからのご注意かな」と言う気付きをいただきました。南無阿弥陀仏。(本)

第41回第2組同朋大会 講師決まる

来年3月7日(土)

開催の第2組同朋大会の講師は、**真城義麿先生**（前大谷中学高校校長、四国教区善照寺住職）に決まりました。ご期待ください。



紙上法話

和国の教主⑧

親鸞聖人における聖徳太子観
池田勇諦先生
生きとるうちに葬式せえ2



親鸞聖人は「雑行を棄てて本願に帰す」とおっしゃった。蓮如さんは「雑行を棄てて一心に弥陀をたのめ」と

おっしゃった。それは何かと言ったら、「生きとるうちに葬式せえ」、「自分の葬式をせえというこっちゃ」と。もとは善導大師のお言葉ですが、親鸞聖人は『愚禿抄』の中で「前念命終」、「後念即生」（『真宗聖典』430P）と述べていらっしゃいますね。

「前念に命終して」、「後念に即ち生まれる」と。言うことは、自力の心に死んで、他力のいのちに生まれ出る。浄土のいのちに生まれ出るということです。「前念命終」、「後念即生」。これこそが「生きとるうちに自分の葬式させてもらう」、たった一つの事柄なのです。だから、生きとるうちに自分の葬式させてもらった人は、死ぬ時には、もう死なんでもいい。こういうことなのですね。おまかせですね。私の仕事じゃない。生きるも死ぬも、私の帳場じゃない。仏仕事です。だから、現在只今自力のいのちに死んで、他力のいのちに生まれ出

る。この自分の葬式をあきらかにさせてもらったかどうか、このことに尽きるのです。それが「逆修説法」の現在的な意味だと私は思いますね。そのことを別の言葉で言えば「平生業成」、平生の時、往生の業事成弁する。現在只今、その一大事が果たさせていただけ。そうすれば、生きるも死ぬもこちらの仕事じゃない。仏さまの仕事。生きとるうちに、自分の葬式がはつきりしていないと、モタモタモタモタ、ウロウロウロウロしなければならぬのではないかと逆に知らされてきますね。真実の宗教は、「逆修説法」なのです。「後生の一大事」と言うことも、そう言うことではないですか。「後生の一大事」の始末は、現在只今ですからね。現在只今、その始末がついたら、私たちのこの身体は、有限相對の身でありますけれども、そのまま無限絶対のいのちを生きさせてもらっていく。だから私の帳場じゃない。私の計らいの帳場ではない。そう言うおおらかな世界ですね。

観世音菩薩の発遣

話を元に返しますが、親鸞聖人は、「父のごとくにおわします」、「母のごとくにおわします」（『真宗聖典』508P）と両親の恩を聖徳太子の上に感ぜられたと言うことですね。申すまでも無いことですが、両親とは、私を生み、養い、育ててくださる恩徳です。大きなはたらきです。親鸞聖人は聖徳太子の上にその恩徳を深く感ぜられた。と言うことは、切り詰めて言えば親鸞聖人の将来を決定づけた法然上人との出遇いへ導いたのは六角堂の観世音菩薩だったと言うことですね。六角堂に百日参籠されて九十五日目の暁に観世音菩薩の夢告を蒙られた。当時の受け止めでは、観音様は聖徳太子の御本地でした。だから観音様と言えば聖徳太子、聖徳太子と言えば観音様と深く信仰されていた。そう

言う時代状況なのですね。ですから、親鸞聖人が六角堂に参籠なさって観世音菩薩の夢告を受けたと言うことは、とりもなおさず聖徳太子の夢告を蒙られたと言うことに他ならなかった。

結果から申せば「法然上人をたずねていけ」と言う、いわば発遣、おすすぬが六角堂夢告の意味するところではなかったかと私は了解しております。このことについては、もう少し申し上げなければならぬこともございますけれども、今は省きます。

親鸞聖人は法然上人をたずねられたと言いますが、比叡山を下りて法然上人のもとにサッと行ってパッと目が開いてご門下になられたと言う話じゃあないのですよ。重い足を引きずって山を下りられた。当時の常識から言えば、比叡の山で仏道修行に打ち込むのが常道です。その比叡の山を捨てる、下りると言うことは敗者です。その時の親鸞聖人は、まさに敗北者でなかったか。法然上人は男であろうと女であろうと、どういう職業の人にも、また若かろうと年寄りだろうと、そんなことは一切関係なく、「ただ念仏申せ」と言う教えだったわけでしょう。20年もの間、比叡の山で過ごされた親鸞聖人が山を下りられた。けれども飛びつくように法然上人に遇われたのはありません。そこに逡巡があったのですね。「法然上人をたずねるべきか。比叡の山に戻って自らを励まして修行を続けるべきか」親鸞聖人は揺れ動いた。「比叡山に留まるべきか。吉水に入るべきか」「法然上人の教えは、破戒の教えではないのか。もしそうなら随うわけにはいかないだろう」。

この逡巡ですわ。（つづく）

⑧池田先生の法話は、〈2015年10月稱佛寺・林暁宇師主催の法座〉を暁宇会がまとめられたものから、引用させていただいています。事務局注）

